英語時称の言語過程
――レールカメラ図による図示の試み――

三　浦　陽　一*

はじめに

表現主体が言語表現にいたるまでのプロセス（言語過程）を一枚の図*によってたどることは，言語の裏舞台を疑似体験することであり，いわば地図の上で旅をすることである。

英語時称（時制ともいう）の言語過程が一枚の図によって統一的に説明されたことはこれまでなかったと思われる。

以下，Ｉで基本用語を解説し，IIでレールカメラ図の構成を説明したあと，IIIで時称ごとに言語過程を図示する＊。

＊本稿の「レールカメラ図」は，鈴木覚氏が原型を考案し，筆者が英語に適用し本稿で発表するものである（鈴木覚「フランス語時称体系試論」2004年，157頁）。ただし「レールカメラ図」という名称は筆者（三浦）がつけた。

I　基本用語

次のように英語の表現を分類できる。

客体的表現…表現対象を客体的に認識した表現。
主体的表現…表現主体の主体的認識をあらわす表現。表現主体の主観で付加した表現。
関係表現…表現主体と表現対象の関係の認識にもとづく表現。
非関係表現…関係表現以外の表現。

英語は以上四種の表現の統合によって成立している。（**図 1**）

*人文学部教授―日米関係史

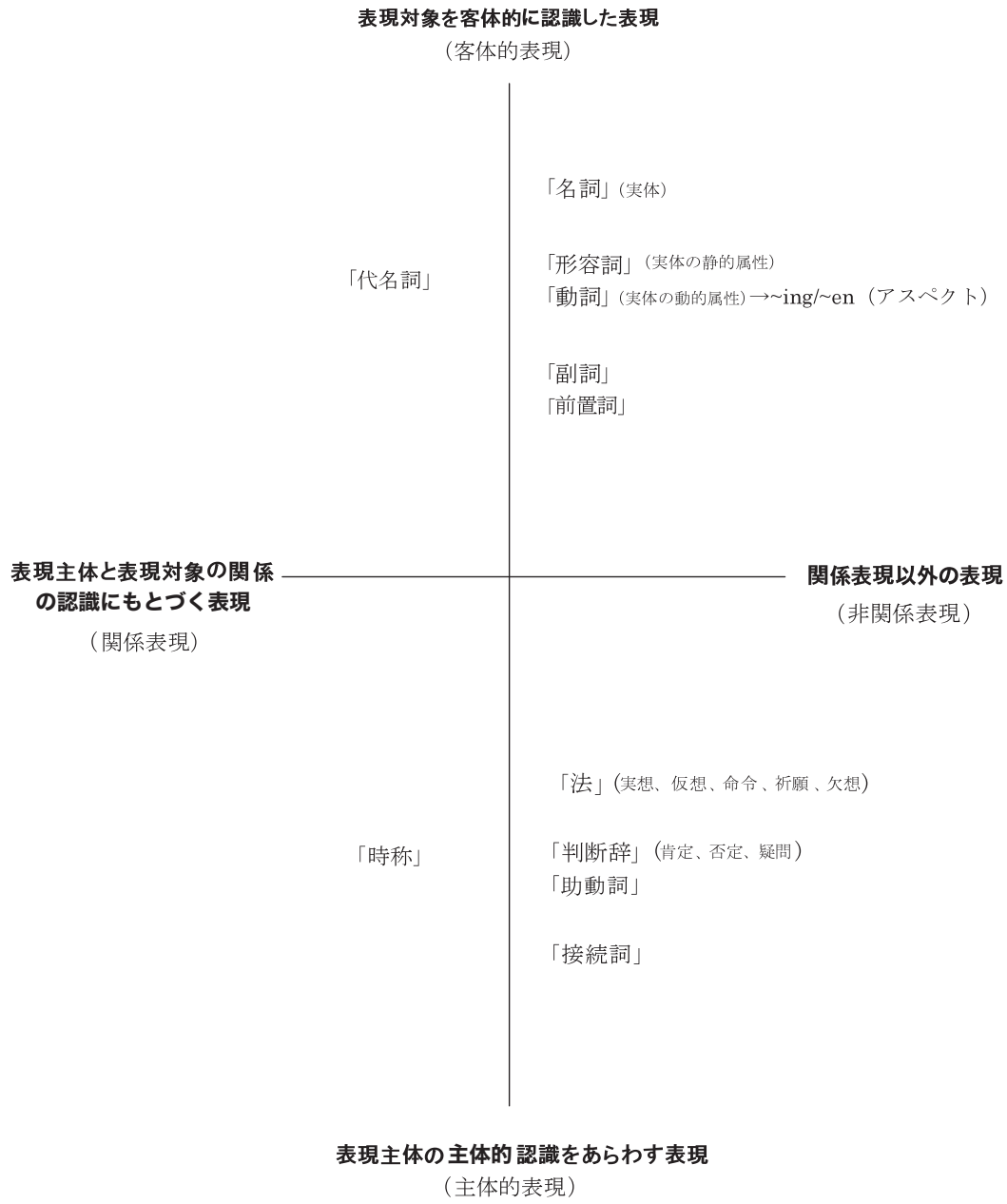


図 1　英語表現の分類（品詞名は目安）

以下，**図 1** の右回りにコメントする。

〈客体的表現かつ非関係表現〉

名詞　実体を把握する表現。英語は主語に立てた**実体**（→名詞）の属性や様態を言語規範

にそって様々に立体化し多面的にすることで文をつくる。

＊英語の簡約化をめざした C. K. Ogden（1889–1957）の Basic English では，全部で 850 語とした基本語彙のうち，動詞 16 個，形容詞 150 個に対して名詞が 600 語となっている。名詞の語彙が最多となる原因は，一般に人間は属性よりも実体をこまかく区別してあつかうこと，英語の名詞は love，walk のように形態を変化させずにそのまま動詞としても使えるものがあること，英語の動詞は前置詞と複合させて複雑な意味を表現できること，などが関連していると思われる。相沢桂子『850 語に魅せられた天才オグデン』（北星堂，2007 年）参照。

動詞　実体の**動的属性**の表現。
形容詞　実体の**静的属性**の表現。

副詞　表現対象に様々な抽象的様態を付加して表現を多面的にする。
前置詞　実体表現（名詞）を後ろに従え，表現対象に空間的・時間的な様態を付加して表現を立体化させる。前置詞は語源的に副詞であったものが多く，意味の明確化のために名詞を添えた結果，前置詞となった。

〈主体的表現かつ非関係表現〉
法，判断，助動詞は II で後述する。
接続詞　and，but，or のような表現主体の推論をあらわすいわゆる等位接続詞は主体的表現である。

〈主体的表現かつ関係表現〉
III で図示する各**時称**がこれに入る。

〈客体的表現かつ関係表現〉
代名詞　代名詞は表現主体と表現対象の関係に着目することによって，少数の語彙であらゆる対象をあらわすことができる（関係表現）。代名詞は名詞の「代わり」ではなく，名詞〈客体的表現かつ非関係表現〉とは別の〈客体的表現かつ関係表現〉である。

…

II　レールカメラ図とは？

ここではレールカメラ図の理解に直接必要な用語を説明する。

レールカメラ（rail camera）

あらかじめ設置したレール上を移動し，選手に並走して撮影するビデオカメラ。水泳やスピードスケートなどの中継で用いられている。

これを模したレールカメラ図によって，ともに時間的存在である表現主体と表現対象を二本の平行線上に描いて英語時称の言語過程を模式的に図示できる。

言語表現の三条件

①表現主体　言語を表現する主体。レールカメラ図では，表現主体は下のライン上を自由に移動し，表現対象を「撮影して映写」（認識して表現）する。

②表現対象　表現対象（被写体）の多くは上のライン上を移動するが（客観的表現），表現主体自身の自己認識を表現したり（主体的表現），表現主体と表現対象の関係をあらわす表現（関係表現）もある。レールカメラ図では，表現対象は表現主体が発する線（↑）によって指示される。

③場面　表現主体が表現対象と直接的（同時的）な関係において表現対象を「撮影」（認識）する状況。表現対象は時間軸上を移動するので，表現主体は下のライン上を観念的に移動して表現対象のもとに行き（**観念的自己分裂**。後述），表現対象と同時的な関係を構成して撮影する（＝**場面を構成する**）。そして表現主体はをの認識を言語規範にそって止揚・保存して「映写」（言語として表現）する。

認識の対象と認識する主体が統一されたものが言語表現（文）であり，言語表現のうち時称の部分を一枚の図にあらわしたものがレールカメラ図である＊。

＊「文とは……**認識の対象と認識する人間との統一**を反映した言語である。これを表現構造に即して説明すれば，認識した外界の表現（客体的表現）と，それに対する話手書手の判断・意志・感情などの主体的認識の直接的表現（主体的表現）との統一である。日本語と英語を問わず，文とは客体的表現と主体的表現との統一なのである。」宮下眞二『英語はどういう言語か』15 頁。

観念的自己分裂

生身の表現主体は現在にしか生きられないのに，未来や過去について述べることができる。それは人が観念的に（頭の中で）自己分裂をおこし，「もう一人の自己」をつくって時間上を移動し表現対象に対峙できる（場面を構成できる）からである。人間がほとんど常時おこなっているこの作用を，ここでは「観念的自己分裂」（三浦つとむ）と呼ぶ＊。

＊観念的自己分裂は互いに他の存在に〈なりこむ〉ことができる能力ともなる。これを心理学のアフォーダンス論では〈対象の不変化項を知覚する〉と表現する。「すべての観察者が同じ環境を知覚することは可能である。**それぞれの視点が他のどの視点にも移動できる**という事実があるからである。『自分を他人の位置に置く』というありふれた表現は，たんなる言葉のあやではない。だからすべての人は同じ外界を知覚できる。」J. J. ギブソン（古崎愛子ほか訳）『生態学的視覚論―ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社，1985 年，80–81，215 頁より要約。ゴチックは引用者。

止揚・保存

「止揚（しよう）」はドイツ語 aufheben の哲学上の訳語で，あるものを否定しつつ，より高次の統一の段階で生かし保存すること。たとえば現実の光景をカメラで撮影するとき，新しい質のうちに現実は保存される。「止揚」だけではわかりにくいので本稿では「止揚・保存」と表現する。

言語における代表的な止揚・保存は「**語彙**」においてみられる。たとえば，表現主体による現実または空想上の一個のリンゴ（対象）の認識は具体的かつ個別的であるが，それを言語規範にもとづいて「リンゴ」という音声・文字で表現するとき，具体的・個別的なリンゴの認識は捨てられるが，認識の内容は保存されて表現される＊。

＊「白黒の無声映画はその表現形式の制約のゆえに色彩と音を直接には表現できないが，このことは対象の色彩や音が作者の認識を経て表現と結びついていること，つまり表現の内容を構成し内容に含まれていることを否定しない。」宮下眞二『英語文法批判』30–33 頁。

言語を理解する者（聞き手）は，一般的な規範たる語彙を手がかりに表現主体の具体的・個別的な認識の内容を推測する。

時称表現において止揚・保存がさかんに行われることについては，たとえば過去時称の説明を参照。

ゼロ記号

言語は認識したものをすべて表現するとは限らない。認識はあるが表現の形式をもたない

とき，それを示すサインがないという意味で，「**ゼロ記号**となっている」と呼ぶ（時枝誠記らの用語）。ゼロ記号の例として，**判断**の項を参照。

…

なお，レールカメラ図では聞き手は描かない。

また，学習者はレールカメラ図上に場所をもたず，超越的な位置から言語過程を鳥瞰できる。ただ，通常学習者は表現主体の位置に自分を乗り込ませて言語過程をたどる。人形遊びの人形に語らせるときのように，表現主体に他人（人形）を入れても面白い効果がある。

法

表現主体の表現以前における自己意識の違いによる区分＊。

＊法は「話者の心的態度を示す動詞の語形変化」などと定義される（『大修館英語学事典』1983 年，509 頁）。「話者の心的態度」とは，言い換えると「命題内容と現実との関係を，話し手がどのような心の傾斜をもって捕らえているかということである。」（安井稔『英文法を洗う』研究社，1989 年，149 頁）。

法には次のような種類がある。**直接法**（表現主体が現実にかんする判断をしている。実想），**仮定法**（現実的ではない判断をしている。空想），**命令法**（表現主体が表現対象にたいして行為の実現を直接命じている），**祈願法**（表現対象にたいして行為の実現を強く望んでいる。祈願）。**接続法**（観念的に分裂した主体が判断を行っていて，現実の表現主体からは何ら叙法的色彩を加えていない，いわば無色透明の意識。欠想）

法の区別は動詞，助動詞，接続詞，語順，抑揚など，様々な表現であらわされる。

判断

判断には，**肯定**，**否定**，**疑問**の三種がある。判断は表現主体の認識を直接にあらわす主体的表現である。三種の判断のうち肯定が基本であり，現実とは異なる認識をもって現実を認識したとき否定となり，肯定の不確定を認識すれば疑問となる。

判断（とくに肯定と疑問）の認識は，表現を省略することも多い（**ゼロ記号**）。それをあえて表現したり文を構成しようとするとき，英語では **have, do, be**（**判断辞**）と **not**（**否定辞**）を用いる＊。

＊「歴史をさかのぼれば**判断は本来ゼロ記号**だったのであり，本来は存在などを表す抽象動詞 be や所有を表す have が判断の主体的表現に転化して，現在のいわゆる助動詞 be や have に至ったのである。」（宮

下眞二『英語はどういう言語か』140 頁)。たとえば，He ■ talks. という文では話し手の肯定という判断の認識はあるがその主体的表現はない（■の部分。いわばここにゼロ記号がある。しいて肯定判断を表現するなら　He **does** talk. となる)。しかし He **is** talking. という文では話し手の主体的な肯定判断が is によって表現されている。

have，do，be の原義は，それぞれ「もつ（保持)」「する（動作)」「いる（存在)」という，人間世界の基本的行為である。

have，do，be は，I *have* a car．He will *do* everything．She *is* in the room. のように，それぞれの原義どおりに**一般動詞**として使われる場合もある。

他方で，I *have* visited the country．He *did* not come．She *is* tired. のように，それぞれの原義を止揚・保存しつつ，判断（肯定，否定，疑問の区別）を明示して文を構成するためにも使われる。この場合の have，do，be を**判断辞**と呼ぶ。

助動詞

助動詞はみずからの判断に関する表現主体の認識をあらわす主体的表現である。いわば表現主体が自分の判断に関する「揺れ」を表現するもので，文の主語に関する客観的表現ではないので注意する＊。

＊助動詞が文の主語に関する判断ではなく，表現主体の心的態度の直接的表現（時枝文法でいう「辞」）であり，したがって文全体を射程に収める語であることについては，次の引用を参照。「助動詞は，**発話者の目から見て**，ある命題が真か偽かということにかかわる，さまざまな意味の層を表現する。」スティーブン・ピンカー（椋田直子訳)『言語を生みだす本能（上)』NHK ブックス，1995 年，161 頁。「文は助動詞を主要語とする最大投射なのです。いわば**文は『助動詞句』**です。」枡矢好弘・福田稔『学校英文法と科学英文法』研究社，1993 年，57 頁。(ゴチックは引用者)

レールカメラ図では，表現主体判断に向けた丸い矢印（↶）によって助動詞の認識プロセスをあらわす。

アスペクト（相）

二つの表現対象間の時間的関係。

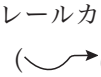
絵を描いている動作主と未来のある時点という二つの表現対象間の時間的関係（持続性）は，英語では動詞語幹に -ing をつけて表現する。He is painting. のような**進行形**は，実体(he)にかんする動的属性（paint）が持続していて未来のある時点まで完了する気配がないことを認識し（-ing)，このことの肯定判断と現在時称（表現主体との同時関係）を判断辞 be の現在形（is）であらわして成立した文である。

他方，絵が描かれている時点とそれが完了している時点という二つの表現対象間の時間

的関係（完了性）は，英語では -en 語尾を動詞語幹につけて表現する。He has painted the picture. のような**完了形**は，表現対象の実体（he）にかんする動的属性（paint）が完了したことを認識し（painted），このことの肯定判断と現在時称（表現主体との同時関係）を判断辞 have の現在形（has）であらわして成立した文である。

アスペクトは客体的表現であり，表現主体との関係を直接あらわさない非関係表現である。アスペクトと時称を区別し，混同しないことは英語の言語過程を理解するうえで重要である＊。

＊「ある対象の二つのあり方の時間的関係（旅行の行われる時点とそれの完了している時点）や二つの対象間の時間的関係（近接未来形を例としていえば，未来の行為とこれからそれに向う動作主との時間的関係）は客体的表現によって表されている。我々はここに相（aspect）と呼ばれている表現の特質を見ることが出来る。相表現はいずれも客体的表現であるという点で，主体的表現である時称表現と根本的に異なるものである。」鈴木覚「フランス語時称体系試論」205 頁。

レールカメラ図では，アスペクトは実体たる表現対象の動的属性の様相として二種類の矢印（  は進行， は完了）で描く。

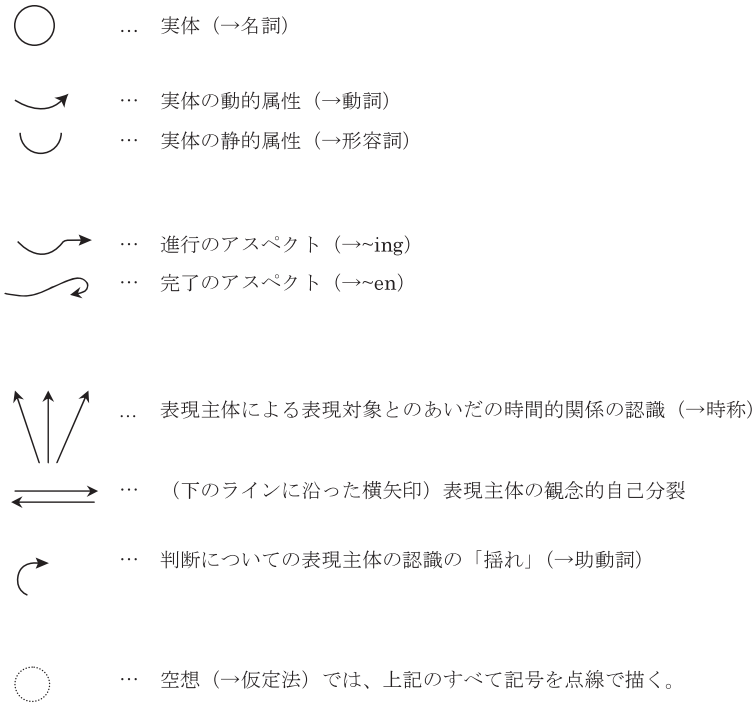
…

III　英語の言語過程―時称別による図示

ともに時間的存在である表現主体と表現対象の相対的な時間的関係についての表現主体による主体的表現が「時称」である。**（主体的表現かつ関係表現）**

以下，通常使われる時称ごとに，例文の言語過程をレールカメラ図によって図示する。

レールカメラ図　記号一覧



…

現在　Juliet is beautiful.　（図 2）

現在時称は，表現主体が表現対象と同時的に存在することの主体的表現である。言語表現が成立するための最低条件―表現主体・表現対象・場面―だけで構成される，もっともシンプルな時称であり，この認識形式はすべての時称に含まれる。

図 2 では，表現対象たる Juliet の静的属性として beautiful があるという表現主体の客体的認識が，is という主体的な判断辞によって断定されることで文（いわゆる五文型でいう第二文型）として整除され，同時に is が現在形であることによって，その認識が「現在」であることが表現されている。

表現主体が表現対象との間で場面を構成する時点は，現実的な（物理的な意味での）「現在」である必要はない。その時点はひとつである必要もない。過去・現在・未来のどの時点であろうと，いくつの時点であろうと，表現主体は観念的自己分裂によって下のライン上を自由に移動して表現対象と場面を構成することができ，そのときの認識は現在時称で表現される。

それが理解できれば，Cats **catch** mice.（習性・属性），The sun **rises** in the east.（真理的命題），Just when I entered the room, Beth **comes**.（歴史的現在），Exams **begin** on Thursday.（予定）といった現在時称のさまざまな「用法」が納得でき，レールカメラ図をたどって現在時称の言語過程が自在に理解できる。

Juliet is beautiful.

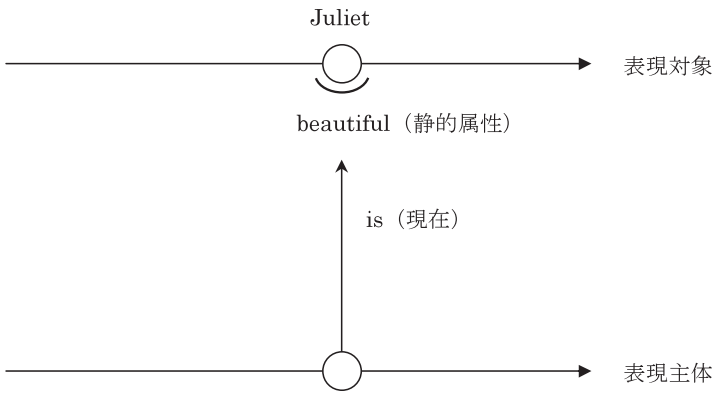


図 2　（現在）

過去　Romeo met Juliet.　（図 3）

表現主体は観念的自己分裂によって現在から過去へと移動し，そこにおいて表現対象との間で同時的な関係を結んで対象を認識する（場面を構成する＝レールカメラで撮影する）。その後現在に帰還した表現主体は過去の場面を止揚・保存しつつ，現在にいる自己の立場から表現を完結する（撮影した画像を上映する）。これが過去時称である。

図 3 では，過去に移動した表現主体が，表現対象たる Romeo の動的属性としての meet とその動作対象としての Juliet を認識したあと現在に帰還し，過去形 met によって表現主体の時間的認識が「過去」であることを表現している。

場面を構成する時点は, 表現主体に既往感（＝現在とは切れて終わったことだという意識）があれば，ほんの一瞬前でもありうるし，ひとつに限る必要もない。過去の時点のどこであろうと，いくつであろうと，表現主体は下のライン上を自由に移動し，表現対象と場面を構成したあと現在に帰還する。

そこから，I **came** back to tell you something.（ほんの一瞬前の過ぎたこと。現在完了的な状況），　I **got** up at seven in those days.（過去の習慣），After he **finished** the book, he returned it.（過去完了的な状況）　といった過去時称のさまざまな「用法」が納得でき，レールカメラ図をたどってこうした言語過程が理解できる。

Romeo met Juliet.

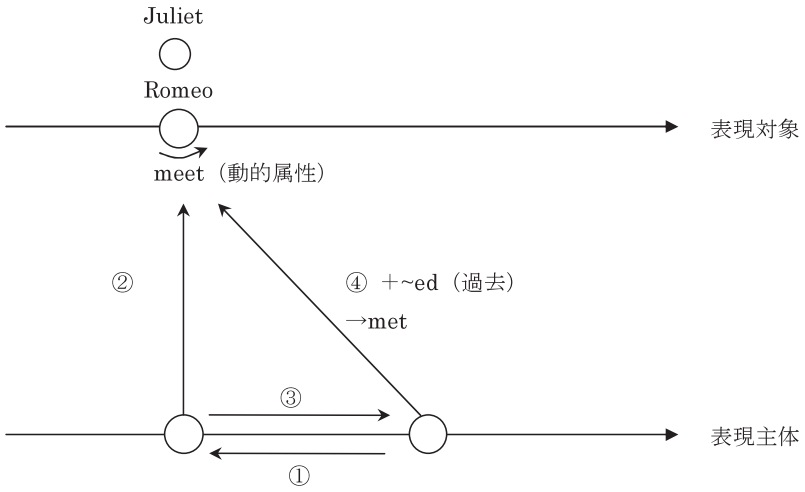


図 3　（過去）

現在完了　Juliet has loved Romeo.　（図 4）

表現主体は観念的自己分裂によって現在から過去へと移動し，過去の表現対象との間で（何度でも必要なだけ）場面を構成する。最後に現在に帰還した表現主体は，それまでに認識した表現対象の動的属性が今や完了していることを認識し，判断辞 have の現在形を用いて過去の認識を止揚・保存して表現する。いわば（多数の）過去における「現在」を現実の現在において集約するのが現在完了時称である。

図 4 では，過去の（いくつもの）時点における love（＋ Romeo）という Juliet の動的属性が現在において完了の相にあることを「過去分詞 」loved があらわし，その内容の止揚・保存を表現主体が has によって表現している。

現在完了時称で使う「過去分詞」の語幹は，どんな動的属性が表現対象になっているかをあらわす客体的表現である。活用語尾 -en は，語幹であらわされた動的属性が完了の状態にあること（完了のアスペクト）をあらわしている。これも対象のあり方の表現であるから客体的表現である。したがって，現在完了時称における時称の主体的表現は have が担っている。

レールカメラ図からわかるように，現在完了時称は〈過去の認識を保持した現在〉という認識をあらわす。このような言語過程の特徴が理解できれば，現在完了の一見多様な「用法」がよく理解できる。

I **have bought** a new car.（完了・結果）　…表現対象たる I の過去の動的属性 buy（1 回きり）が保持されたまま，現在ではそれが完了の相にあることを述べる。

He **has read** this book three times.（経験）表現対象 he の過去の動的属性 read（複数回が可能）

Juliet has loved Romeo.

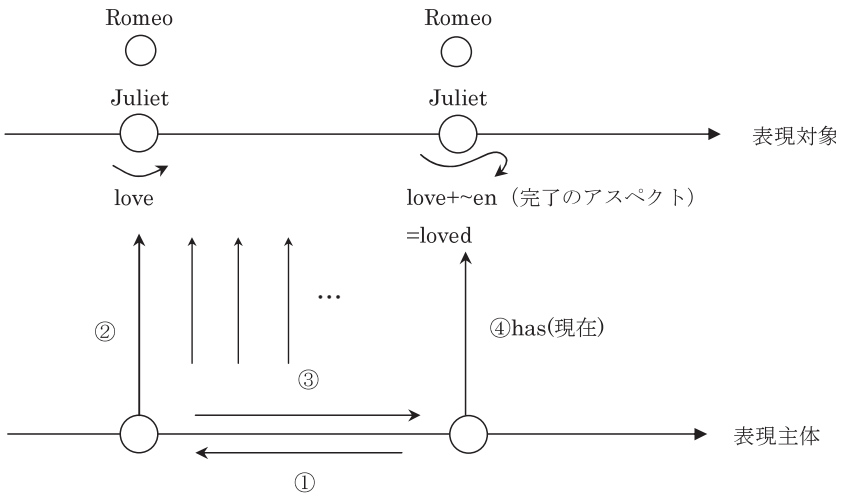


図 4　（現在完了）

が保持されたまま現在に至ったことを述べる。その間に three times（三回）発生したのだから，「経験」を述べたことになる。

She **has been** here for some time.（継続）　…表現対象 she の過去の動的属性 be（一般動詞。何回と言うより絶えず持続している）が保持されたまま現在に至ったことを述べる。

過去完了　Juliet had been waiting for Romeo.　（図 5）

表現主体は現在から過去へ，そしてさらにその過去（過去の過去）へと移動し，表現対象との間で（何度でも必要なだけ）場面を構成したあと，過去に帰還して表現対象の動的属性が完了していることを認識する。最後に現在に帰還した表現主体は判断辞 have の過去形を用いて，過去に至るまでの認識を止揚・保存して表現する。これが過去完了時称である。

図 5 では，「過去の過去」において waiting（＋ for Romeo）という進行の相にある Juliet の属性を判断辞 be で肯定する。その後の「過去」において，この進行の相は完了していることを判断辞 be の「過去分詞」been があらわし，さらに been waiting 全体が Juliet の属性として表現対象となって，判断辞 have（もしくは has）によっていったん止揚・保存される。最後に，現在に帰還した表現主体は以上の認識全体を判断辞 have の過去形 had によって止揚・保存している。過去完了時称は，いわば〈過去における現在完了＋過去〉であることがレールカメラ図によって理解できる（**図 4** 現在完了および**図 3** 過去と比較せよ）。

Juliet had been waiting for Romeo.

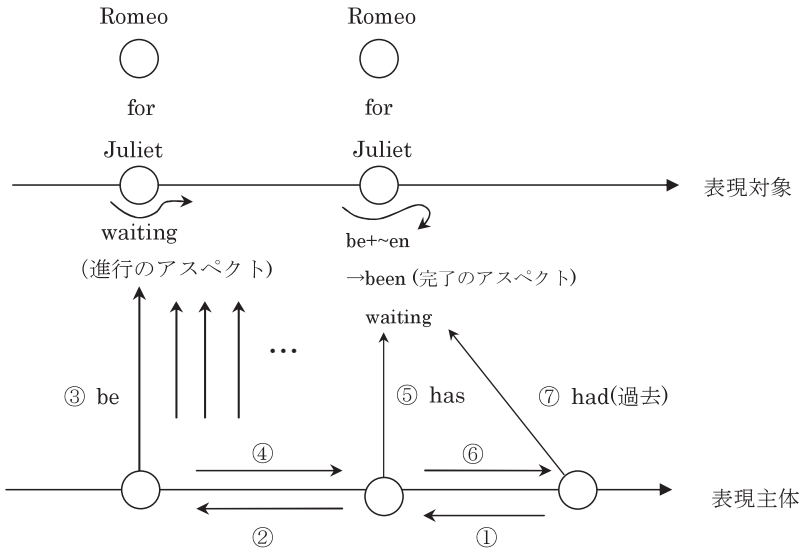


図 5　（過去完了）

未来　Romeo and Juliet will be remembered.　（図 6）

表現主体が自己の判断に確信的推測の認識を付加する will（や shall）という主体的表現（助動詞）を用いて，まだ生起していない表現対象についても表現できる。

図 6 では，まだ生起していない表現対象のあり方について，表現主体は観念的に未来の方向に移動し，その時点において表現対象（Romeo and Juliet）の動的属性が完了の相にあると認識し (remembered)，これを判断辞 be を用いて肯定的に判断し，かつこの判断についての表現主体の（主語の, ではない）の確信的推測をあらわす助動詞 will を付加している（and は表現主体が加えた並置的関係を推測する接続詞）。

Romeo and Juliet will be remembered.

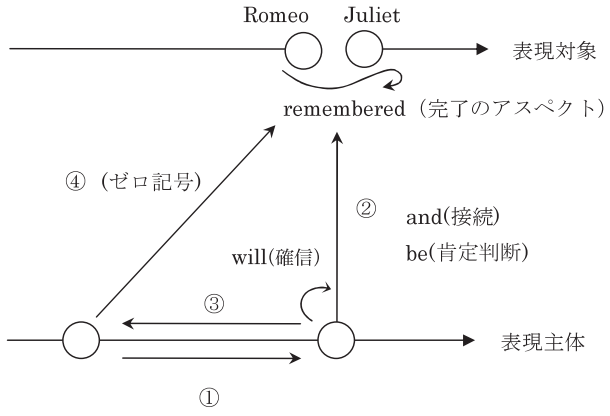


図 6 （未来）

仮定法過去　I wish I could talk to Juliet.　（図 7）

仮定法では表現主体が自分の判断について表現以前に空想性を感じている。直接法では表現主体の意識が現実的で，表現対象も現実的と意識される。逆に，仮定法では表現主体の意識が空想なので，表現対象も空想的な存在となる。表現に利用する時間軸も空想である。

すなわち仮定法ではすべてが空想性を帯びる（観念的自己分裂の文法化）。このことを示唆するためにレールカメラ図ではすべての線を点線で描く。

図 7 では，まず I wish によって表現主体の意識の空想性を聞き手にもわかるように明示している（ここは直接法）。そして表現主体は空想上の時間軸を「過去」へと移動し，表現対象たる I の動的属性 talk（＋ to Juliet）について，その可能性があるとの主体的表現（can）をつけくわえている。その後現在に帰還した表現主体は，以上の認識が「過去」（→現在の実態とは切り離された空想）のものであることを can の過去形 could で表現している。

現実にありうることについてあえて仮定法を用いて表現すると，その認識がたんなる空想であることを強調するので，聞き手に対するおしつけがましさを回避できる。これが仮定法の「ていねい用法」といわれるものである。

I wish I could talk to Juliet.

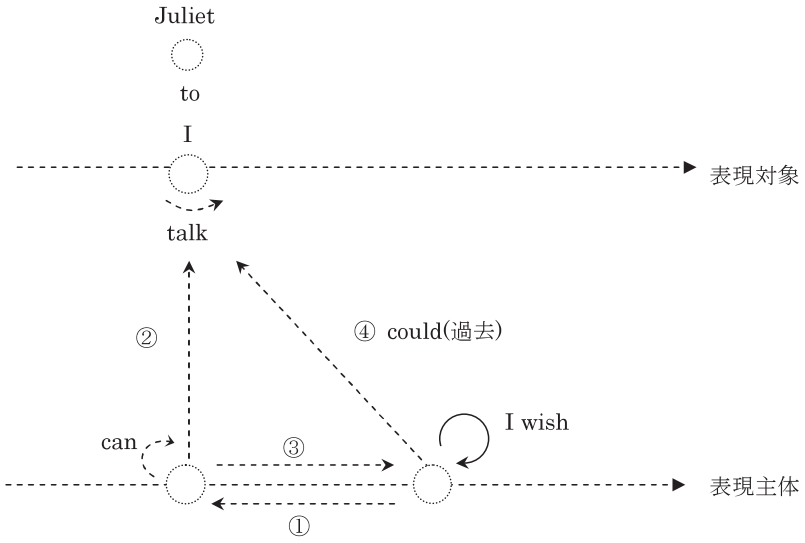


図 7　（仮定法過去）

仮定法過去完了　Juliet could have hated Romeo.　（図 8）

表現主体は表現以前に空想性を感じ，仮想的に現在から過去，さらにその過去（過去の過去）へと移動し，表現対象との間で（何度でも必要なだけ）場面を構成したあと過去に帰還し，表現対象の動的属性が完了していることを認識する。最後に現在へと帰還した表現主体は以上の認識を止揚・保存して表現する。これが仮定法過去完了である。

図 8 では，「過去の過去」における hate という Juliet の動的属性が，過去において完了の相にあることを「過去分詞」hated があらわし，その認識を判断辞 have によって保持するが，その判断が可能性を帯びているにすぎないという主体的認識を can によって付加している。最後に現在に帰還した表現主体は，以上の認識プロセスが現在とは切り離された「過去」（空想）のものであることを助動詞 can の過去形 could によって表現している。

Juliet could have hated Romeo.

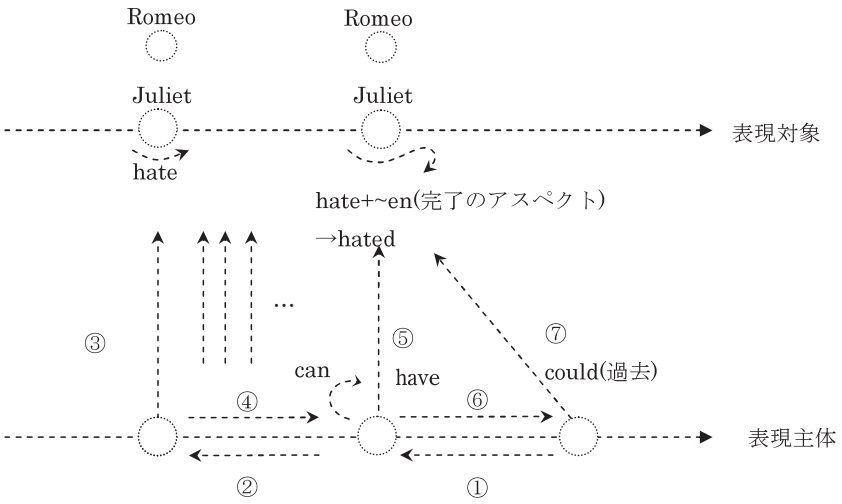


図 8　（仮定法過去完了）

主要参考文献

三浦つとむ『日本語はどういう言語か』（講談社学術文庫，初出 1954 年）
宮下眞二『英語文法批判』日本翻訳家養成センター，1982 年
宮下眞二『英語はどういう言語か』季節社，1985 年
鈴木覚「関係詞論―〈代名詞〉論の批判的検討」佐良木昌編『言語過程説の探求　第一巻　時枝学説の継

承と三浦理論の展開』明石書店，2004 年
鈴木覚「フランス語時称体系試論」佐良木昌編『言語過程説の探求　第一巻　時枝学説の継承と三浦理論の展開』明石書店所収，2004 年

（2010 年 5 月 12 日　受理）